

瑞穂遺跡Ⅱ

第5次調査

大野城市文化財調査報告書 第95集

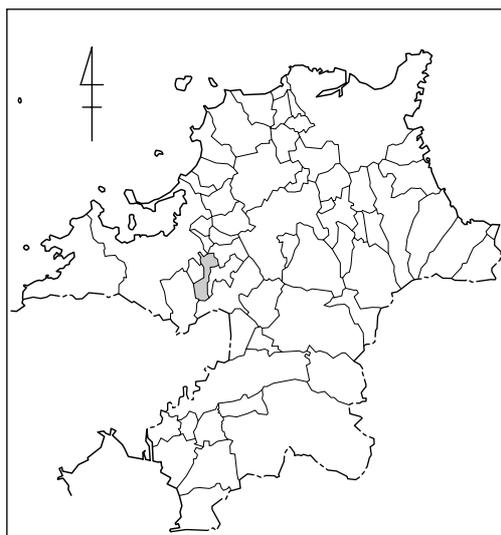
2011

大野城市教育委員会

瑞穂遺跡Ⅱ

第5次調査

大野城市文化財調査報告書 第95集



2011

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた緑の街です。市域は南北に長い形をしており、大野城跡・水城跡・牛頸須恵器窯跡の国指定史跡をはじめ、多くの歴史遺産があります。

瑞穂遺跡は市域の西側に位置し、遺跡の広がりには春日市にまで及びます。今回実施した第5次発掘調査では、古墳時代の遺構・遺物が確認されました。瑞穂遺跡の他の調査地では、古墳時代前期の遺跡が見つかっており、春日市側では奈良時代の遺跡が確認されるなど、古墳から奈良時代にかけての集落が営まれていたものと考えられます。この地域は、水城西門から鴻臚館へ向かう官道に隣接しており、古代集落の成立・展開を考える上で非常に重要です。今後本書の成果が教育や研究の面におきまして、広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりご理解と全面的なご協力をいただいた佐藤文彦氏やライフパートナーズ・21株式会社様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成23年3月25日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した瑞穂遺跡第5次調査の記録である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴って実施したものである。
3. 調査に係る遺構実側図作成及び写真撮影は、渡邊和子が行なった。
4. 遺物写真撮影は（有）文化財写真工房に委託した。
5. 挿図中に使用した方位は、すべて国土調査法第Ⅱ座標系で表示した。
6. 本書の執筆は「Ⅰはじめに Ⅰ調査に至る経過」を石木秀啓が、その他の執筆はすべて渡邊が行ない、編集は渡邊が行なった。
7. 本書掲載の遺物・図版・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経過	3
2. 調査の体制	3
II. 位置と環境	5
III. 調査の内容	
1. 調査の概要	6
2. 遺構と出土遺物	6～12
①SD	6～12
②ピット（柱穴）	11～12
IV. まとめ	13

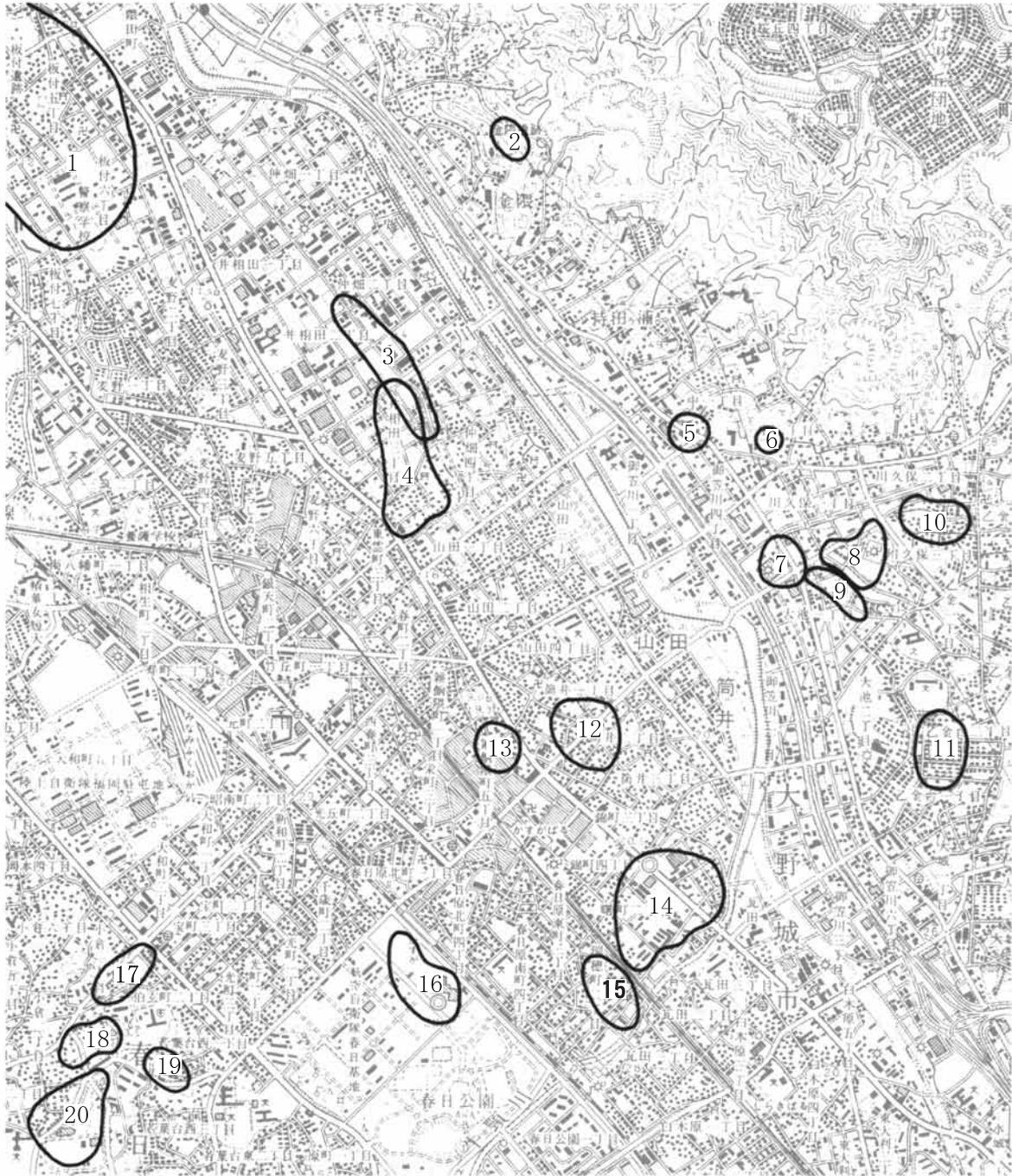
図版目次

Fig. (挿図)

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S1/25,000)	1
Fig. 2 調査地点位置図 (S1/5,000)	2
Fig. 3 遺構配置図 (S1/100)	4
Fig. 4 SD土層実測図 (S1/40)	7
Fig. 5 SD01・02実測図 (S1/60)	8
Fig. 6 SD01出土遺物実測図 (S1/3)	9
Fig. 7 ピット出土遺物実測図 (S1/3)	12

PL. (写真図版)

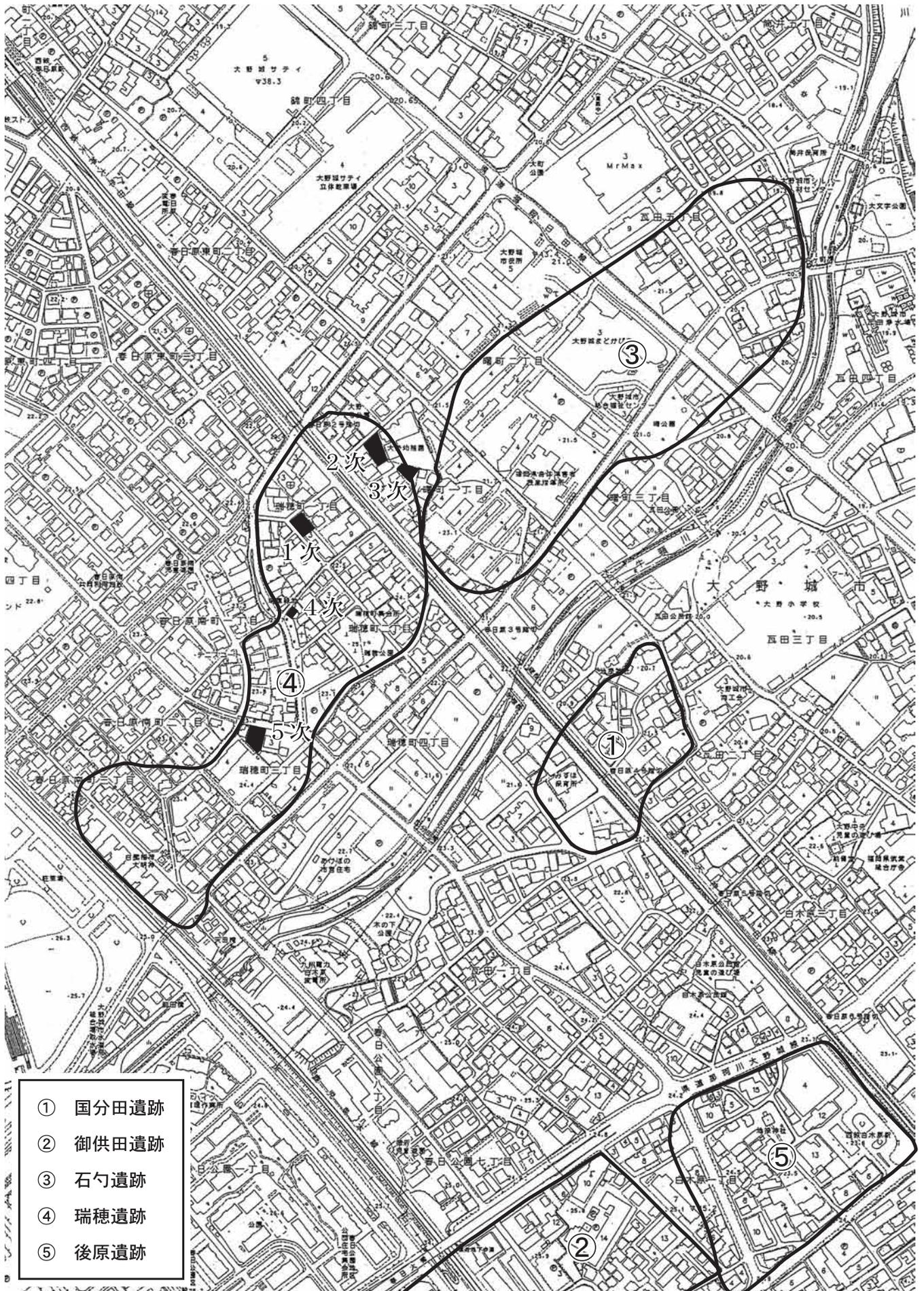
PL. 1 全景
PL. 2 遺構小穴
PL. 3 溝土層
PL. 4 出土遺物



〈凡例〉

- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1 板付遺跡 | 2 金隈遺跡 | 3 仲島遺跡 | 4 井相田遺跡 | 5 塚口遺跡 |
| 6 御陵前ノ椽遺跡 | 7 ヒケシマ遺跡 | 8 森園遺跡 | 9 中寺尾遺跡 | 10 松葉園遺跡 |
| 11 銀山遺跡 | 12 村下遺跡 | 13 雑餉隈遺跡群 | 14 石勺遺跡 | 15 瑞穂遺跡 |
| 16 駿河遺跡 | 17 伯玄社遺跡 | 18 ナライ遺跡 | 19 西平塚遺跡 | 20 高辻遺跡 |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1/25,000)



- ① 国分田遺跡
- ② 御供田遺跡
- ③ 石勺遺跡
- ④ 瑞穂遺跡
- ⑤ 後原遺跡

Fig. 2 調査地点位置図 (S 1/5,000)

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

瑞穂遺跡は、大野城市瑞穂町を中心に広がる。遺跡の範囲は、北側は春日市駿河C遺跡、西側は春日市原ノ口遺跡に接する。過去に4次にわたる発掘調査が実施されている。今回瑞穂遺跡5次調査として発掘調査を実施したのは大野城市瑞穂町3丁目4-1にあたる。

当該地は、平成19年7月26日に試掘調査を実施し、現地表下0.9mで遺構が確認された。開発内容としてはマンション建設が予定されており、計画どおりに工事が実施されると確認された遺構が破壊されるため、発掘調査が必要として協議をおこなった。しかしながら、その後事業計画が難航し、埋蔵文化財発掘調査に関する協議は一時中断された。

平成21年10月20日、再度埋蔵文化財に関する照会がおこなわれ、当該地は既に実施した試掘調査により遺構が確認されていることを伝えた。今回の開発内容もマンション建設であり、建設に先立ち発掘調査が必要な旨回答した。事業者からは、埋蔵文化財発掘調査依頼書が平成21年11月6日に提出され、建設予定図面を沿えて平成21年11月6日付けで発掘届を福岡県教育委員会文化財保護課あてに提出した。事業者からは早期の発掘調査着手を求められたが、他の発掘調査で対応ができなため、22年度当初から発掘調査を実施することで合意した。

調査は、平成22年4月5日～5月30日の間実施した。引き続き整理作業を実施し、平成22年度中に終了した。調査面積は、175.5㎡である。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、市と事業者で50%ずつ負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた佐藤文彦氏ならびにライフパートナーズ・21(株)に感謝申し上げたい。

2. 調査体制

発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。

教 育 長	古賀 宮太
教育部長	森岡 勉
ふるさと文化財課長	舟山 良一
係 長	中山 宏
主 査	徳本 洋一 石木 秀啓 丸尾 博恵
主任技師	林 潤也 早瀬 賢 上田 龍児
嘱 託	石川 健 吉田 浩之 茂 友美 國分 ゆみ 渡邊 和子（調査・整理担当）

〔発掘調査参加者〕

高木幸子 大海雅子 岩切ふえ 藤田和子 岡本妙子 田中照子 日野律子 飯田三治
溝口忍 香野博通 川崎敏次郎 佐藤寛行 吉田秀俊 田中良一 諏訪博恭

〔整理作業参加者〕

松岡信子 町井裕子 村山律子 白井典子 仲村美幸 井上理香 渡部美香 穴井和子 船越桃子
子 深野人美 大藪英美 仲前富美子 井口のるみ子 上方高弘

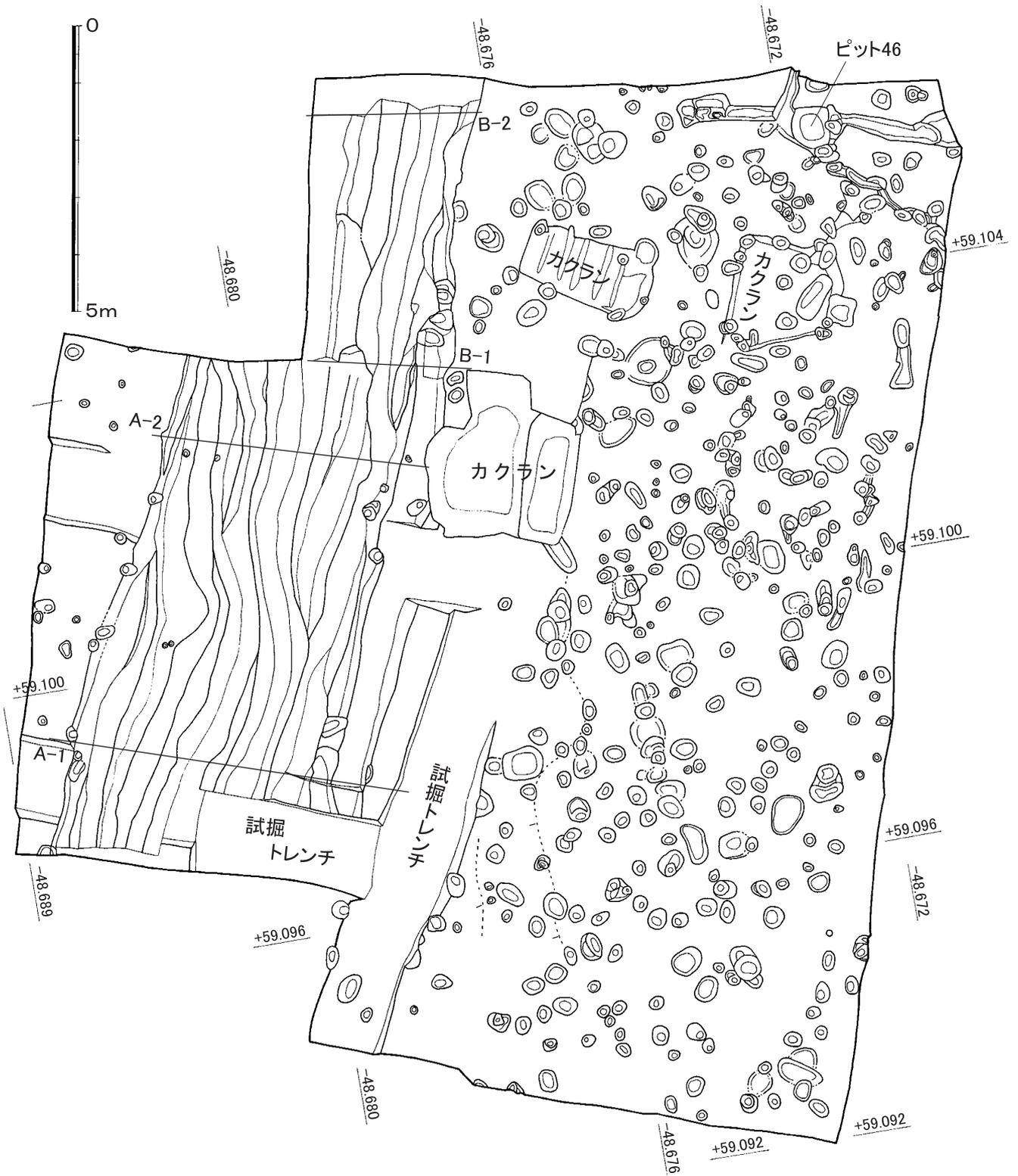


Fig. 3 遺構配置図 (S 1/100)

Ⅱ. 位置と環境

福岡県大野城市は、福岡県の中央部のやや西側にある。市域は南北に細長く、中央部が狭まったヒョウタンの様な形をなす。北部から中央部には筑後川から分れた御笠川が南東から北西に流れて博多湾へと注ぐ。この御笠川流域には平野部が形成され、多くの遺跡の所在も確認されている。

東部には三郡山系の大城山や乙金山や井野山の山地が迫り、南部には背振山系から派生した牛頸山が迫る。東部の大城山・乙金山・井野山の山麓周辺部には多くの古墳群や遺跡が確認されている。

また南部の牛頸山周辺には多くの須恵器窯跡の所在が確認されていたが、団地造成等の開発により多くの発掘調査が実施されて、現在では九州最大の牛頸窯跡群として周知されている。

瑞穂遺跡は、大野城市役所に近接し、また春日市との行政境にある。私鉄駅沿線として早くから開発の進んだ地域で旧地形の想定のにくい場所であり、文化財については不明な点の多い地域でもある。しかしながら周辺域は春日・大野城市両市ともに最近再開発による調査例が増加し、これらの遺跡調査により、地域の歴史が少しずつ明らかになってきている。

瑞穂遺跡の南側には牛頸山に源をもつ牛頸川が北東に向かって走り、御笠川へと合流する。この牛頸川に沿って、標高23～24mを測る舌状の微高地が形成され、御笠川との合流地点付近まで延びている。この微高地には南西から原ノ口遺跡（春日市）や瑞穂遺跡・石勺遺跡が立地している。

瑞穂遺跡は福岡県教育委員会作成の遺跡分布図には縄文～古墳時代の複合遺跡として登録され、遺跡の中心部は第5次地点から北東へ70mに位置する瑞穂公園付近と推定されている。

これまでの再開発等の協議の結果から遺跡は総体的に削平を受けて、遺構の失われた場所も多く遺存状況の極めて悪いものが多いと推定されている。

今回調査の第5地点は福岡県大野城市瑞穂3丁目4-1に位置し、5次地点の北東側では過去4次の発掘調査が実施されている。また南西側では原ノ口遺跡（春日市）が3次の調査を実施している。

調査の成果として瑞穂遺跡では古墳時代前期～中期の遺構や水路が、原ノ口遺跡では奈良時代の住居跡や水路が主として検出されている。

今回の調査では弥生時代中期後葉から古墳時代の溝が主に検出され、他の時代の遺構は皆無と云ってよい。周辺域で5次調査地点と同時期の遺跡を概観すると瑞穂遺跡の北東側で同じ微高地の上の先端部に位置する石勺遺跡があげられる。この石勺遺跡内では現在までに12箇所の調査が実施されているが、弥生時代の遺構だけが主に検出できた地点と古墳時代の遺構が主に検出された地点や古墳時代と奈良時代の複合した遺構が検出された地点とに大まかに分類できる。なかでも石勺J地点では奈良時代の墓地として占地されていることを特長とする。また瑞穂遺跡5次地点の南西側に位置し、同微高地に所在する原ノ口遺跡（春日市）1～3次調査成果では奈良時代の遺構が主として確認され、古代が中心の地域ともいえ、石勺遺跡J地点との関連も興味深いものがある。さらには瑞穂遺跡や石勺遺跡の西側には駿河遺跡B・C地点が所在し、原ノ口遺跡と同様に古代もしくは古代以降の遺跡が所在している。

そして牛頸川を挟んで対峙する微高地には国分田遺跡が位置する。しかし瑞穂遺跡と同時期に所在したのではなく、遺跡は概ね中世の頃が主体であろうと考えられているが、調査事例も少なく現況では推定の域はでていない。

Ⅲ. 調査の内容

1. 調査の概要

調査対象地は、試掘調査での平面・土層観察によれば現地表面より深さ60～90cmまでに客土があり、この客土直下に10cm前後の火山灰混じりの黒ボク土が堆積し、この黒ボク土から遺構検出面となるが、調査区の西側と北側の一部は、この黒ボク土は削平されていて、特に北東側の一部では八女ローム層が遺構検出面となる。試掘調査では西側に大溝、東側にピットの所在が確認されている。溝は深さが1.6m前後で幅も3m前後と広いことから、かなりの土量が生じると考え、調査は対象区を東西のA・B区に分割し、ピットの確認された東側から調査を開始した。また調査区は建物予定の基礎柱から拡張した1～1.5mを想定し、また隣地との距離も十分に確保できうる範囲で設定した。調査で検出した遺構はSD(溝)4条とピット(柱穴)多数である。

2. 遺構と出土遺物

①SD (Fig.4・5・6、PL.1・2・3・4)

調査区のB区で4条の溝を検出した。溝の最上層には全面に黒褐色砂質土が堆積し、幅3.6～4mの大溝を想定して調査を開始した。最上層に堆積する土は窪みに一気に同じ土を埋めているため溝のプラン検出時には一条の溝である想定しかできなかった。土層図作成や遺物取りあげを考慮し、溝を南からA区・B区と任意に分割して掘り下げた。

B区内の掘り下げ時に溝肩部から深さ20cm前後でSD03のプランが確認できたが、最深部が10cm前後と浅いため土層図での確認に留めた。さらに40cmほど下げた位置で、溝が二条に分れるのを確認しSD01・SD02とした。しかしSD01が掘り直されて、繰り返し使用されているため土層図中では便宜上SD01-1、SD01-2に分けた。土層セクションは南側からA-1図、A-2図、B-1図、B-2図とした。

SD01

調査区の西端に位置する溝でSD02を切って流れ、主軸は南端から北に5mまでの位置はN-20°-Eに向き、ここからSD02とは重複せずにN-6°-Eに向きを変えて流れる。南側に向かって僅かだが深くなっていく。また調査区北端から南3.8m付近でSD02と重複し、東壁の立ち上がりは残っていない。SD01は4回に渉って掘り直しや補修などで繰り返し使用されている。便宜上SD01を層序からSD01-1・SD01-2とした。新旧関係は、新しい方からSD01→SD01-2→SD01-1となる。

調査区内だけの成果だが、A-2の土層を観察するとSD02を切ってSD01-1が最初に掘られている。SD01-1の断面は逆台形状をなし主軸をN-20°-Eにとり、SD02とは重複せず、北側部でN-6°-Eに向きを変える。検出長11m、上端幅3.5m前後、中段の幅3.1m、深さ1.4m前後で幅広の深い溝となる。溝の底面の埋土には黒褐色土が堆積し、水の流れがあった事を想定させる微砂粒の堆積も僅かに見られる。この底面の標高は23.120mを測る。ここでは水が滞留し壁や側壁が安定しなかったのか、最下層の埋土の上に黒色粘質土を20～25cm積んで、丁寧に底面や立ち上がりの壁として積み上げている。地山が砂および砂質土で構成されるため、底面や側壁

を修復しながら使用したと考えられる。この底面の標高は23.300mを測る。A-1の土層は、底面の標高23.200mを測り、堆積する埋土は黒褐色粘質土で、A-2からすると10cm程度深くなっている。A-1の層序では、やはりA-2と同様に意図的に黒色粘質土を積み上げて改修した痕跡が確認できる。改修された底面上には暗褐色砂質土が堆積して、A-2で観察できる様に丁寧な積み上げにはなっていない。これはA-1に近くなるほど補修や改修された黒色粘質土の底面や壁面が崩れて混在した可能性が考えられる。

SD01-2はSD01-1の後に規模を縮小して掘削されている。A-1・2で観察すると底面の黒色粘質土を切って掘削されている。A-2では底面幅25cmのU字状の断面形状をA-1では

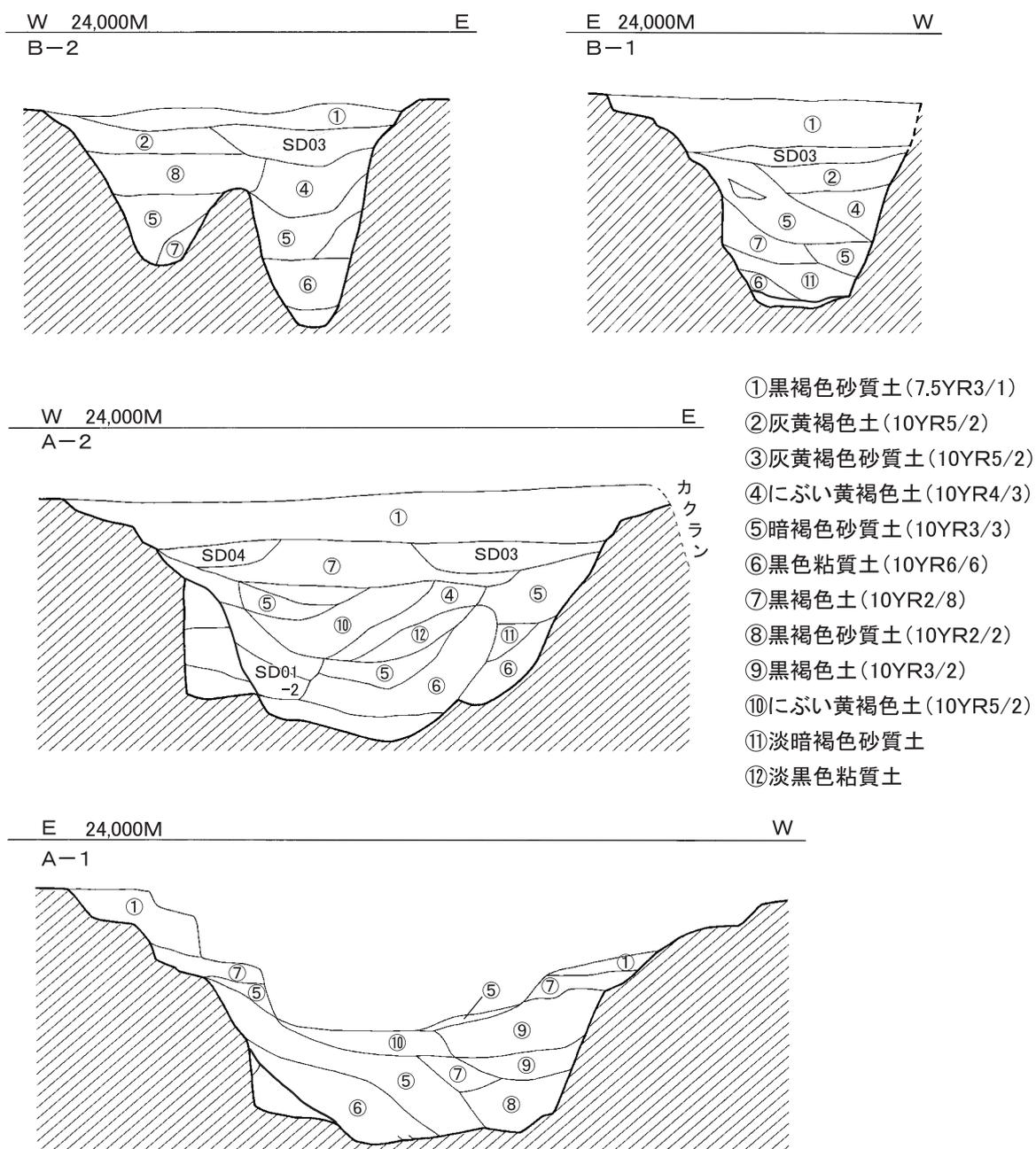


Fig. 4 SD土層実測図 (S1/40)

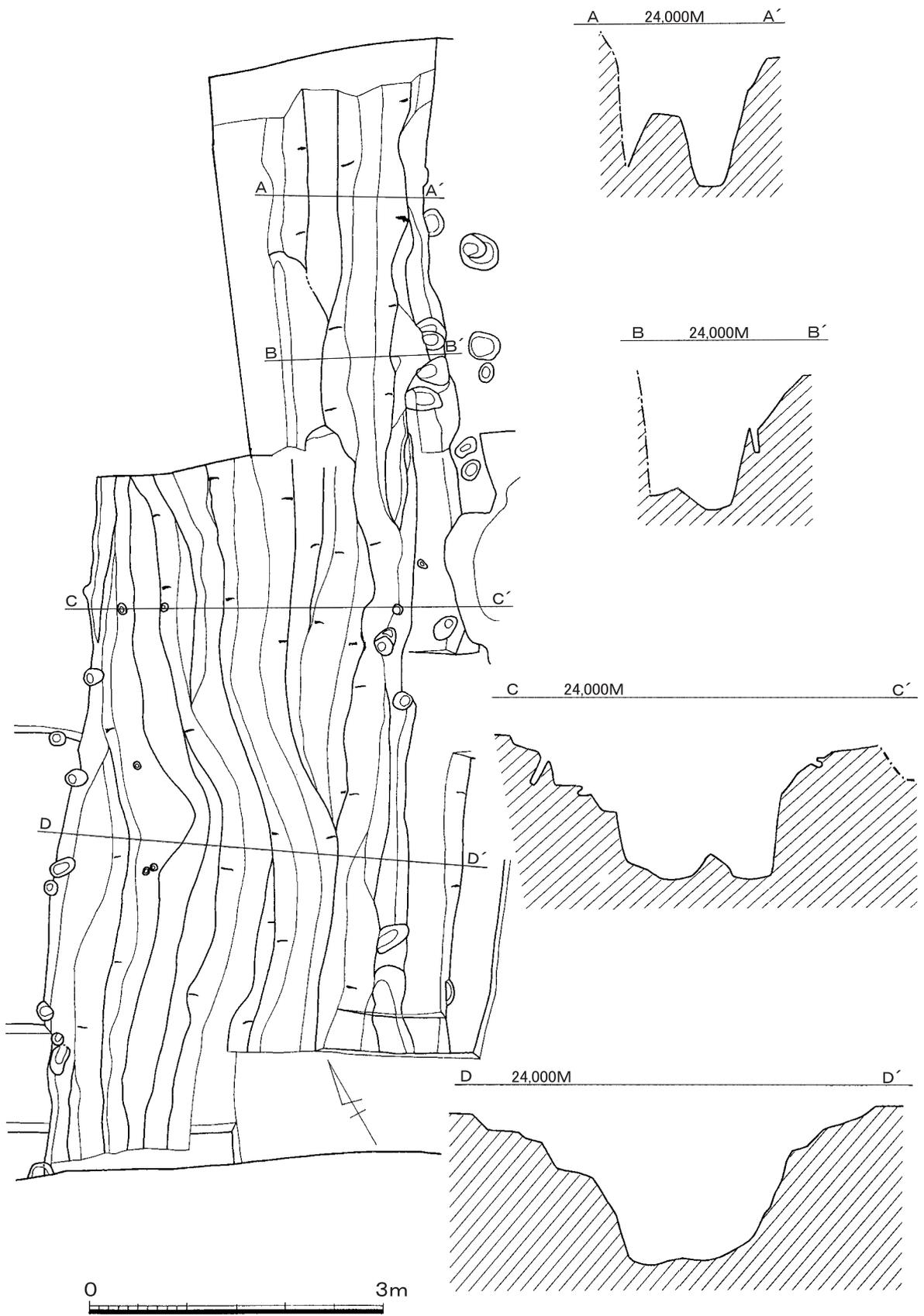


Fig. 5 SD01・02実測図 (S1/60)

底面幅45cmで、側壁が斜めに立ち上がる広めのU字状の断面をなす。規模を推定すると上端幅2.5～3m、中段幅1.2～1.8m、深さ1.2m前後のものと思われる。

SD01-2の埋没後にSD01を掘削するが、左右の側壁面は改修後のSD01-1をそのまま利用している。底面の標高はA-2では23.600m、A-1では23.850mとして南側が15cm程度低くなる。A-2では底面幅1m、A-1ではSD04に切られ数値の確定ができないが75+ α cmを測り断面形状は緩やか曲線を描く。

溝平面図の左右側壁には肩部から下に4段の段や稜線が検出された。それらは明確に平坦地を形成するものや緩やかで平坦地を有しない稜線などの形状で検出した。右側壁にも同様な肩部や段・稜線が検出されたが、この肩部はSD02当初からのものと考えて良く、下で検出された段や稜線がSD01・SD01-1・SD01-2のいずれのものとなるかは現況では区別がつかない。

また左側の上端で検出した肩部はSD01-1のもので当初からの肩部と考えて良いと思う。この肩部で特記すべきは、肩部を切って径20cm前後、深さ20cm前後の浅い小穴が、ほぼ等間隔(1～1.05m)の位置に検出される事であろう。これは同様な検出事例(筑紫野市岡田遺跡)もあり、溝蓋などを固定するために杭を打った小穴と考えられる。残念ながらSD01・SD01-1・SD01-2東側の肩部が失われているため対になる小穴は検出できないが、興味深いものと言える。

また二段目・三段目の肩部には径10cm前後の小穴が確認できる。これらも杭穴と考えて良いと思われる。これらの小穴は1～1.5mの間隔で検出できた。しかも小穴の下端は斜め方向に向き、深いものが多い。これらも溝蓋などを安定させるための杭の痕跡と考えられる。これも検出できた小

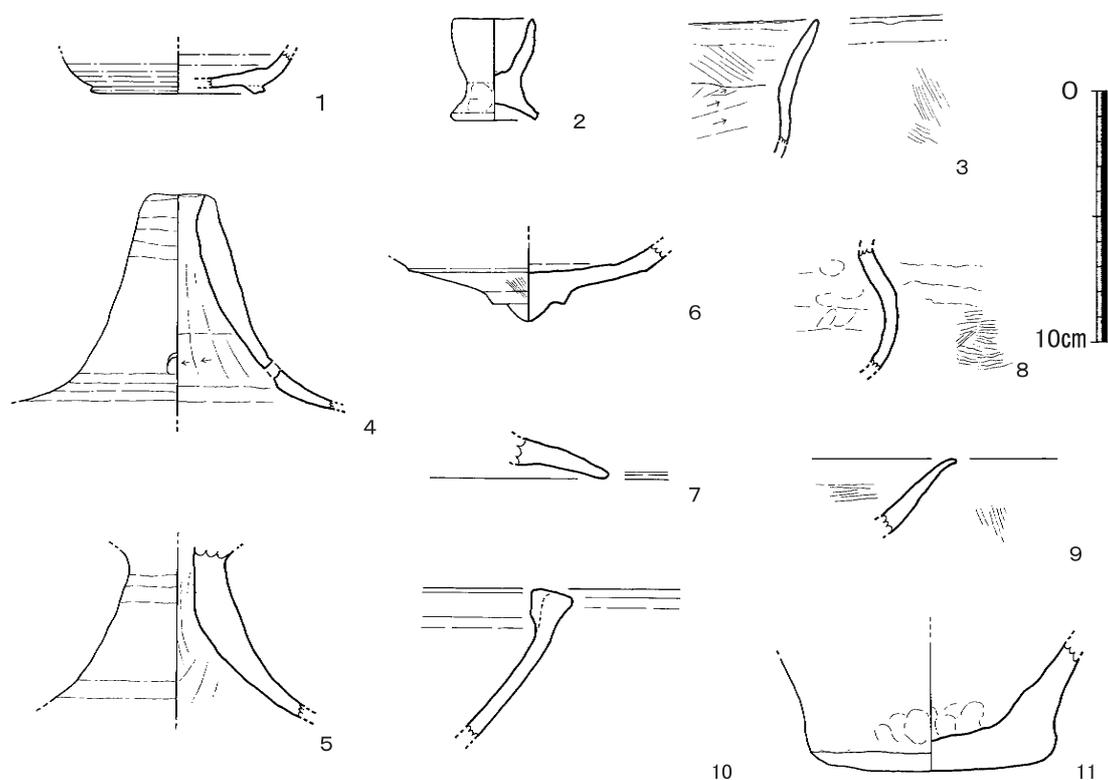


Fig. 6 SD01 出土遺物実測図 (S1/3)

穴の杭が各々にどの溝のものであるかは現況では確認できない。

出土遺物 (Fig.6、PL.4)

1は須恵器高台付坏の底部片。復元高台径7cm、高台高3mm、残存高1.8cmを測る。内底面はナデ調整で、内外面の体部は回転ナデ調整を体部と高台の境には回転ヘラケズリを施している。胎土に僅かな石英・長石を含み、焼成は良い。2の土師器手づくね土器は、復元口径3.2cm、裾径3.5cm、器高4.05cmを測る。体部の内外面は、ともにナデ調整を施し、指頭痕を消す。脚部外面には指頭痕を残すが部分的にはナデ調整で仕上げ、脚部内面にはナデ調整を施している。胎土に砂粒を含むが、焼成は良い。3は土師器の小型丸底壺で、復元口径10.6cm、残存高4.9cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、最大径は頸部と胴部がほぼ同じとなる。口縁内面はハケメ後ヨコナデ、外面はナデ調整後ハケメ調整を施す。体部内面はヘラケズリで、外面はハケメ後ナデ調整で仕上げ。4の土師器高坏脚部片は残存高8.6cmを測る。内面上半部はナデ調整、下半部はヘラケズリで裾部付近はナデを施す。体部と裾部境に一孔を穿つ。受部と脚部は平坦。5は残存高6.65cmの土師器高坏脚部。外面はヨコナデ調整を内面上半にはシボリ痕を残すが、下半はナデ調整で仕上げている。胎土には少量の石英・長石を含み、焼成は良好である。6は残存高3.15cmの土師器高坏受部片で、器表は内外ともに磨滅が著しい。胎土には石英・長石を含むが、焼成は良い。7は土師器高坏の裾部片で残存高1.65cmを測る。胎土には少量の石英・長石・赤褐色粒を含み、焼成は良い。8は残存高8.6cm、胴部最大径4.95cmを測る小型丸底壺。内面胴部下半はナデ調整、上半部は胴から口縁部へとナデ上げている。9は残存高3.4cmを測る土師器甕の口縁部片。10は残存高6.2cmの瓦質土器鉢の口縁部片で、体部内面にはハケメ調整を口縁端部から外面体部はヨコナデ調整を施し、焼成は良い。11の弥生時代中期中葉壺の底部は、底径9.6cm、残存高5.2cmを測る。内外ともに器表面の磨滅が著しい。胎土には多量の石英・長石を含むが、焼成は良い。底面は平坦でなく、僅かに丸みをもつ。

SD02

溝の中でも東端に位置し、SD01とSD03に切られる。検出長11.5m、上端幅1.8m、中段幅1.2m、深さ1.2m前後で、底面の標高は23.340m。主軸をN-20°-Eに向く、肩部がやや蛇行するが流れは、ほぼ直進する溝と思われる。B-2の層序では肩部から50cm下に八女ローム層があって壁面・底面を形成する。このため水流等による崩れはなく安定した形状を保っている。この付近での断面は、ややシャープな細長いU字状の形状をなし、上端部幅1.2m、中段幅0.9m、深さ1.18mと推定できる。また底面の標高は24.340mを測る。B-2で見られる東側壁の立ち上がりがSD02の本来の壁の立ち上がりの形状を示しているといえる。

B-1周辺部でSD01との切りあいが大きくなって、しかも地山が砂質土に変化したために溝の形状が安定していない。溝の数値についても未掘部分が西側にある事やSD01とSD03に切られるため詳細な数値は測定できないが、B-2と比較すると上端幅や中段幅は広がり、深さは10cm深く、標高が23.350mとなって規模は上端幅2.3m、中段幅1.3mとも推定できる。

また断面形状もB-2と比較すると不整なU字状へと大きく変化する。

A-2付近でもSD01とSD03に大きく切られ、詳細な数値は測定できない。右側の壁面は重複の影響がないため安定した形状を保つが、左側はSD01に幾度となく切られるため遺存して

いない。深さは1.28mで標高は23.350mを測り、上端幅2.3m、中段幅1.6mとも推定できる。上端幅には、さほどの変化はないが中段幅が広がる可能性がある。推定断面も底面に丸みを持つV字状の形状となる。A-2から以南は地山が安定のない砂質のために左壁側を除いては崩れが大きいと思われる。

A-1付近では水が滞留したのか、底面は広がり、壁も崩れた断面形状となる。底面までの深さはB-2からA-2までは、僅かな高低差で流れて、A-1付近では僅かに10cmだけ深くなる。水は北東から南西方向に流れているが、この調査区内では高低差の緩やかな底面であった可能性があり、むしろ水が滞留した結果の崩壊と考えた方が妥当かも知れない。

右側の肩部は、部分的に攪乱や試掘トレンチに切られるが当初からのものと考えて良い。この肩部にもSD01-1の左側肩部に見られるような径10cm前後の小穴が確認できる。攪乱やトレンチで消失した部分もあるこのために小穴の設定された間隔の詳細な数値は確認できないが、SD01と同様な間隔(1.05~1.5m)で設定されていたものと考えられる。

B-2の断面で示されるのがSD02の本来の形状であれば、肩部下の二段目・三段目の平坦部や稜線はSD01かSD01-1であり、それらに沿って検出される小穴は各々の溝に伴うものと思われ、各々を決定づけるには、やや根拠に欠ける。

SD03

溝の最上層から20cm下で検出した。B-2では幅1.08m、深さ20cm、B-1は幅1.2m、深さ25cmとやや幅広で深く、A-2では幅1.2m、深さ18cmとなる。B-2からA-2の範囲までは、SD02とほぼ重なる様な向きで走り、A-2からA-1に向かう途中でSD04に交差し、向きを北西方向に変える。断面形状は浅いU字状をなす。埋土の堆積は単一層で、底面には水が流れた痕跡はみられない。溝は水路としては考えがたく、区画溝としての可能性が強い。SD04と交差する箇所には土層セクションを設定しなかったため、SD04との新旧関係は確認できなかった。

SD04

B-2からB-1までの範囲は未調査区へ続くため位置・規模の確認はできていない。確認できるのはA-2からで、ここでもSD03と同様に最上層から下20cmの深さでプランが確認できる。

A-2側では幅72cm、深さ13cmを測るが、A-1では幅1m、深さ30cmと規模が大きく変化する。流れの方向は南東側へと向くがSD01からSD03のように底面に極度の高低差は造られていない。断面形状は不整な浅いU字状をなし、埋土の堆積はSD03と同様に単一層で、底面には水が流れた痕跡は見受けられず、やはり区画溝と思われる。またSD03との新旧関係については確認できていない。SD03とSD04の埋土はにぶい黄橙色(10YR6/3)でほぼ同様な埋土として確認できるため、さほど時期差はないものと思われる。

②ピット(柱穴)(Fig.3・7、PL.4)

多数のピットを検出したが、遺物を伴うピットは50個のみである。ピットの多くは径20cm、深さ10cm前後が大半で、総体的に安定した建物を建てる柱穴とは考えにくい。ピットの規模からして簡易な建物などに伴うピットと思われる。ただ北東側で検出した内の数個のピットは、大半のピットより径・深さ等に規模が大きくなるが、纏まって建物跡として捉えられるものはない。この中でも

径45×60cm、深さ60cmの規模をもつピット46は特長をもつ。調査区の北東部で排水管の掘り方に切られて検出されたピット46は底面から20cm上に厚さ10cmの焼土塊が中央部に堆積し、埋土に灰混じりの黒色土がつまっていた。焼けた壁面をもつ特殊なピットを想定して掘り下げたが、ピット自体の壁面には被熱した痕跡は見出せなかった。焼土塊はバラバラに崩れた形でなく、ひとかたまりのまま埋っていた。焼土塊としたが、比熱度は弱くしまりのないものである。ピットの底面の礎板に代わるものかとも考えたが、ピットの底面を底上げできる程強固のものではない。焼土塊が埋まったのはピット46だけであったが、埋土が同様なピットはピット46の周辺部に多い。さらに調査区の北側にこの規模のピットが多く存在している可能性もあり、もしかしたら調査区の北側に同時期の建物遺構が所在する可能性も十分にある。

また検出したピットは調査区のA区に集中し、B区での検出は少ない。これはB区の調査区端は溝の肩部から2～3m前後しか離れていないため当然の結果と理解できるが、調査区A区は溝の東側で、しかも調査区の東側には牛頸川が流れ、溝と川に挟まれた狭い場所が遺跡の中心部で建物等が多く建てられていたとも考え難い。また遺跡の立地を同様にする牛頸川左岸に所在する原ノ口遺跡第1次から第4次（春日市）の調査事例では調査区東側は遺構自体が少なく攪乱が多くあり、遺構は、ほとんど検出されていない。むろん原ノ口遺跡は奈良時代が遺跡の主体である事や牛頸川からは、やや離れているなど瑞穂遺跡との違いもあるが、今回の調査区だけの事例にしても問題が残る。

遺物の出土したピットを遺構図に表すと調査区内の全域に分散して位置し、片寄った出土状況でもない。近世陶磁器片の出土した2個のピットは調査区の南端に所在し、溝の肩部に近い位置で検出した。他は総てが古墳時代の土師器細片で図示できるものは少ない。今回の調査区には概ね古墳時代が主体の集落が立地していたものと思われる。

出土遺物 (Fig. 7、PL. 4)

ピット46から出土した**12**は、残存高4.8cmの土師器甕の口縁部片。内外面ともにハケメ後にナデ調整を施し、内外面の口縁端部は横ナデで仕上げている。胎土には僅かな石英・長石・雲母を含み、焼成は普通。**13**の小型丸底壺片は残存高5.5cmを測る。胴部から頸部までの小片でピット48から出土。胴部に最大径をもつ。胴部の内面にはヘラケズリを施し、頸部の内外面はヨコナデ調整で、外面胴部はナデ調整で仕上げている。胎土に3mm以下の石英・長石・雲母を含んで、焼成は普通となるが、内外面の器表は摩耗が著しい。**14**は染付け碗の高台部片でピット50から出土。復元高台径8.2cm、高台高1.4cm、残存高2.45cmを測る。体部から高台内面まで施釉される。緻密な胎土で、焼成も良い。

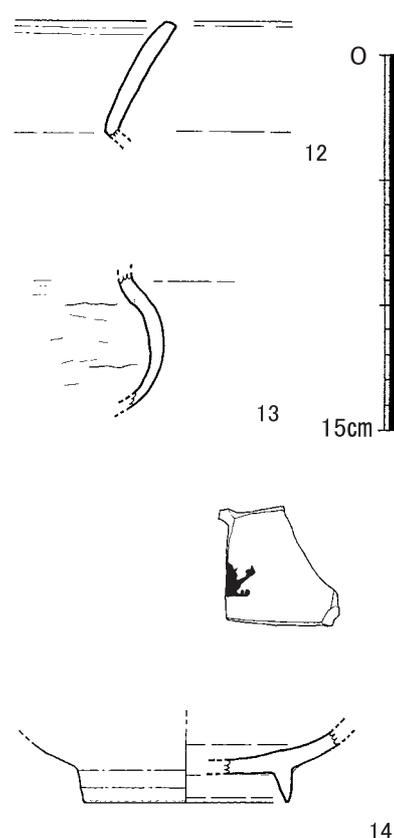


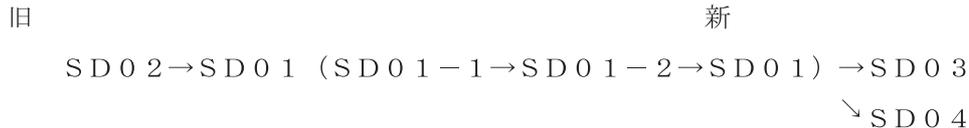
Fig. 7 ピット出土遺物実測図 (S1/3)

IV. まとめ

今回の調査対象面積は175.5㎡と狭い範囲であり、調査地点は瑞穂遺跡の一部でしかなく遺跡全体を掌握できるものではない。今後周辺での調査により検討できる可能性を考慮し、今回調査の成果をふまえ今後の検討課題をまとめたい。

溝について

溝は下記の順で掘削されている。



SD02は、ほぼ同方向に流れ、それほど深い溝でなく区画溝的な性格のものと思われる。

次に掘削されたSD01-1は幅・深さともにSD02の倍の規模となり、方向も途中から北方向へと向きを変え、その後補修・掘り直しを繰り返し4回に涉って使用されている。溝の規模は新しくなるほど溝の幅も狭く、浅くなっていく。調査区の東側に牛頸川が位置する事も踏まえると溝の内側は当然ながら北側と思われる。

次にSD01出土の遺物は、弥生時代中期中葉から古墳時代頃のものしかなく、これらの土器を詳細にSD01-1・SD01-2・SD01と分別はできない。またSD02は出土遺物も少なく時期の決定できる遺物はない。しかもSD01・SD02は部分的には重複している事から、これらの遺物はSD02のものである可能性も残る。このように各々の溝の時期決定はできないが、溝は弥生時代中期中葉頃か、もしくは弥生時代中期中葉後に大きな規模になり、流れの方向も向きを変えて掘り直された可能性が考えられる。

ピットについて

検出されたピットのほとんどが調査区東側で検出された。検出したピットで遺物の出土したものは50個を数え、調査区に全域に分散している。ピットの大半は径20cm前後で浅いものが多いが、建物の柱穴と考えて良い規模のピットは北側に片寄って検出した。これらは溝と牛頸川に挟まれた微高地上に所在すると思われる。この事は、この調査地点だけの結果かもしれないが、非常に興味深い成果と言える。これらが今回の調査成果であり、周辺での調査事例が増えて検討できる課題とも云える。

検討課題をまとめると

1. 溝が弥生時代中期中葉頃か、もしくは弥生時代中期中葉に幅・深さの規模を大きくした溝が掘削された。
2. 溝と牛頸川に挟まれた台地上にも軽易な建物が存在した。

圖 版



A区 (西から)



B区 (西から)



西壁全景



近景



B-2



B-1



A-2



Fig.6-1



Fig.6-10



Fig.6-2



Fig.6-11



Fig.6-4



Fig.7-12



Fig.6-5



Fig.7-14

報告書抄録

ふりがな	みずほいせき							
書名	瑞穂遺跡Ⅱ							
副書名	5次調査							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第95集							
編集者名	渡邊和子							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 大野城市曙町2丁目2-1 電話092 (501) 2211							
発行年月日	西暦2011年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みずほいせき 瑞穂遺跡	ふくおかけんおおのじょうしみずほちよう ちょうめ 福岡県大野城市瑞穂町3丁目			32° 59' 58"	131° 00' 02"	平成22年 4月5日～ 5月30日	175.5㎡	共同住宅 建設
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
瑞穂遺跡	集落	弥生 古墳・近世	溝 ピット	弥生土器 須恵器 土師器 陶器				
要約	福岡県の中央部のやや西寄りの標高23～24mの微高地上に位置する。 検出遺構は4条の水路もしくは区画溝と多数のPitで遺跡の総体的な時期は概ね古墳時代と思われる。							

瑞穂遺跡Ⅱ

第5次調査

大野城市文化財調査報告書

第95集

平成23年3月25日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5